

話題提供：「日本のオニ・『鬼』に投影されたもの」

2014/01/16 野口民治

I、節分のオニのさまざまな姿

節分では「福は内、鬼は外」とかけ声をかけて豆撒きをするところが多いが、「福は内、鬼も内」など別の唱えかたをするところ、また、邪悪な存在ではなく、悪霊を鎮める善なる存在、祖先の霊の化身とするところもある。「オニ」のとらえ方は一様ではない。

「鬼も内」・・・吉野金峯山寺蔵王堂・・・鬼を招集し改心させる。

「鬼の宿」・・・天川村天河神社（大弁財天社）・・・鬼を祖霊として歓待する。

悪霊鎮護・・・五條市念仏寺陀陀堂、桜井市長谷寺

祖先の霊・・・大分県国東地方

招福、除魔・・・兵庫県播磨・摂津地区

II、代表的なオニ伝説

「鬼」に関する伝説は各地にある。特に著名なのは桃太郎伝説のルーツとされる岡山の「温羅（ウラ）」、坂田金時が登場する大江山の「酒呑童子」、そして役行者の左右に侍する生駒暗峠の「前鬼・後鬼」。

（温羅伝説）

崇神天皇記・・・四道将軍の一人・彦五十狭芹彦命（吉備津彦）による西征の記述。

鬼ノ城遺跡・・・後世の山城（？）、鍛冶工房跡もある。

（伝説：温羅は百済の王子で巨大かつ凶悪。別名：吉備彦）

（酒呑童子）

場所、人物、征討者について多数の話がある。

福知山市大江町、京都市老ノ坂・・・

酒呑童子、伊吹童子・・・

頼光（坂田金時、渡辺綱ら四天王）、藤原保昌・・・

時代設定は平安時代（一条天皇時代？）。話が定型化したのは南北朝時代（？）

（前鬼・後鬼）

役行者は実在人物。鬼の子孫と称する人々・集落も現存。

Ⅲ、日本人は「オニ」になにを仮託したのか

現在、私たちが持っている『鬼』のイメージは主に平安時代中期以降、仏教布教の手段として創られたものである。

「オニ」という日本語は古くから存在していた。ただ、古代の日本人が持っていた「オニ」の概念は、現在とは全く異なるものであったらしい。話し言葉から書き記す文字へ、外来の漢字を利用して「日本の文字」が成立していくなかで、「オニ」から『鬼』への変化が生じた。平安時代以前の記述に現れる「オニ」の姿や現代の研究者達が提起している「オニ」の原像のいくつかを紹介する。

(i) 古代の文書に現れる「鬼」

- 1、語源は「隠」 (倭名類聚抄、源順、930年代。 卷第一、天地部第一、神靈類三)
人神 (オニ) 周易云人神曰鬼、居偉反、和名於邇、或説云、於迺者隠奇 (音) 之訛也、鬼物隠而不欲顕形、故以称也、
(注:「箋注倭名類聚抄」狩谷楨齋・・四聲字苑云、鬼人死神魂也)

甲骨文字 (殷代)

金文 (周代)

肥大した頭部

人の手足

邪な

- 2、万葉集 (7~8世紀): 「鬼」の訓みはシコ。醜いの意と卑下した表現。
日本霊異記 (9世紀): 鬼、鬼魅ともに「モノ」と訓み、悪霊を意味する。

3、日本書紀 (成立720年)

- ◎ 雷ニ鬼・・伊弉諾尊が桃を投げて雷を撃退する話。
「此桃用避鬼之縁也」 (神代上、第五段、第九の一書)
- ◎ 身を隠す=拒否される者の姿・・高天原を追放された素戔鳴尊の姿。
素戔鳴尊、結束青草、以為笠蓑、而乞宿・・世諱著笠蓑、以他人屋内。
又諱負束草、以入他人家内。有犯此者、必債解除。此太古之遺法也
(神代上、第七段、第三の一書)
- ◎ 異形の神々、異語を話す人々=邪鬼・・天孫降臨に際し葦原中国の状況について
多有螢火光神、及蠅聲邪神。・・葦原中国之邪鬼。 (神代下、第九段)
- ◎ 辺境にあって中央の秩序に順わぬ人々・・日本武尊の東北遠征に際して
邑之勿首。・山有邪神。郊有姦鬼。遮衢塞徑。 (景行天皇四十年七月)
- ◎ 漂着者、外来者・・・佐渡嶋に來た肅慎人について。
乘一船舶而淹留。春夏捕魚充食。彼嶋之人、言非人也。亦言鬼魅 (オニ)、
不敢近之。 (欽明天皇五年十二月)

◎ (人の盟を見守り、違反者を罰する神聖な力)

若貳此盟、天災地妖、鬼誅人伐。

(孝徳天皇即位前紀)

◎ (正体不明の不気味な存在) ・ ・ ・ ・ ・ 齊明天皇の葬儀に際して

是夕於朝倉山上、有鬼、着大笠、臨視喪儀。衆皆嗟怪。 (齊明天皇七年八月甲子朔)

4, 風土記 (713年撰述指示)

◎ (異形の姿で「人を喰う」) 目一鬼来而、食佃人之男 (出雲国阿用郷)

◎ (魍魎は鏡をこわがる) 昔在魍魎 ・ ・ ・ 疾鬼面鏡自滅 (常陸国久慈郡)

(魍、山神也。魎、老物精也。 ・ ・ 漢書・王莽伝 ・ ・ 植垣節也)

(ii) 民俗学の先達の見方

1, 柳田国男 ・ 支配勢力が渡来する以前からの先住者。山地生活者。超能力者。

(生駒のオニなど、この例)

2, 折口信夫 ・ まれびと、巨人 (大人=オオニン=オニ) 説

一年の豊作を祝福する春の祭りにおにが出てくる。常世神の変態。

「まれびと」として歓待する。

(田植えのときにやってくる) 群行の神は皆、蓑を着て、笠に顔を隠していた。昔考えたおにの姿である。

鬼は常には姿を現さず、霊の集中することによって巨大な姿を現す。

(iii) 現代の研究者達の提起

(1～5は「怪異の民俗学 第四巻 鬼」小松和彦編、河出書房新社、からの要約)

1, 山路興造 ・ 節分行事は国家行事として行われた国分寺の修正会・修二会における結願の追儺が地方寺院にも及び、これと民間での五穀豊穡を祈願する春迎え行事とが融合したもの。貴族の氏寺では除魔の呪法を分かり易く具現するために芸能も演じられた (10世紀末頃)。ここに鬼が登場するのは12世紀頃からである。大寺院の鬼は邪悪の象徴であったが、民間では春に来る神と習合したものもあった。

(「修正会の変容と地方伝播」)

2, 小松和彦 ・ 「鬼」は人間の否定的な形 (反社会的・反道徳的な分身) として造形されたもの。歓待するのは速やかに退散してもらうため (折口説に反対)。

また、ナマハゲの鬼は共同体の秩序への服従を強制し、服従しないものを排除するという二面性をもつ。 (「もう一つの「まれびと」論」)

- 3, 和歌森太郎・日本人の心の深層には山に対する恐れや信仰が厚く深く横たわっている。水を分ける神が棲み、死者の靈魂が行き着く。また悪い spirits も充滿。山伏は山と人との間を媒介しながら、山への信仰を深めることに働いてきた。修行ではまず自らを鬼と化し、その上で邪を従える。(「山と鬼」)
- 4, 若尾五雄・鬼伝説の伝わる地域に鉄・金・銀・銅などの鉱脈がある所が多い。精錬に使った水が血を連想させ、地下(暗い所)から有用な物(埋蔵物=宝)を取り出す。打出の小槌は昔、鉱夫が使った山槌と同型。(「鬼と金工」)
- 5, 内藤正敏・津軽岩木山の鬼神伝説では鬼が殺された場所と退治に加わった従者(サル、トリ、イヌ)とに方角的な対応がある。また、強い勢力を持つ先住者(国津神)がいた事実があり、古代の製鉄遺跡(高度の技術)の存在、固有の農産物などから漂着した渡来人の可能性もある。(「鬼の原風景」)

- 6, 馬場あき子・「鬼の研究」(筑摩書房、文学を中心に系譜や姿から分類、考察)。から系譜からは

- (1) 神道系：日本民俗学上の鬼(祝福に来る祖霊や地霊)
- (2) 修験道系：山人系の人々が修験道を創設した中で生まれた山伏系の鬼、天狗
- (3) 仏教系：邪鬼、夜叉、羅刹、地獄卒、牛頭・馬頭
- (4) 人鬼系：放逐者、盗賊、賤民など
- (5) 変身譚系：怨恨・憤怒・雪辱などの情念をエネルギーとした復讐のための鬼

姿・形や特異性からは

- (1) 異形のもの(醜なるもの、体の部分の損なわれたもの)
- (2) 形をなさぬ感覚的な存在や力(「モノ」とよばれた力)
- (3) 神と対をなす力をもつもの(邪しき神、姦しき鬼)
- (4) 辺土異邦の人(異風の蝦夷や肅慎人、荒々しい性格と体軀の違い)
- (5) 笠に隠れて視るもの(朝倉山より喪を視る鬼)
- (6) 死の国へみちびく力(鬼のため枉殺せられ)

- 7, 小松和彦・内藤正敏・「鬼がつくった国・日本」(光文社、両者の対談)から鬼の二つの系統：①物語や芸能など想像上の鬼。

②反体制、共同体から排除された実在の人。

排除された人々が、いろんな「職」や「芸」と結びつき、彼らのネットワークが歴史を動かす力になった。

(まとめに代えて) 「歴史」は支配権力の形や移動を中心に記述されるが、その底流にある民衆の生活や想念、関わりなどについての記録は少ない。これを考える手がかりのひとつに「オニ」があるのではないか。代表的な鬼伝説からは中央の権力によって制圧された在来勢力の記憶、あるいは疎外された人々の存在や怨念が感じられる。

「鬼の背後の暗闇を凝視すると、日本文化の深層の記憶が浮かび上がってくる(内藤)」。